

京都外大図書館市民利用制度利用者の声

## ラテン語古辞書の宝庫

原田 裕司

私は現在では大学に属さない市井の一学者ですが、昨年三月までの19年間大阪大学で外国語の教師を務めました。主に一、二年生向けのドイツ語と文学部のラテン語の授業を担当し、週に一回はラテン語の非常勤講師として京都府立医科大学の教壇にも立ちました。大学教員という長年の職務を辞しましたのは、自然科学者の妻がこの春からドイツで研究滞在することになり、私も小学生の息子とともに同行しようと思ったからです。私のこの文が掲載される頃には、私は家族とともに旧東ドイツのハレという町にいます。

大学を辞めると、大学図書館の利用などの点で研究に不便になるのではないかと不安もありましたが、いざ辞めてみると、必ずしもそうではありませんでした。一市民となって逆に私に好都合になった一つの例が、京都外国語大学付属図書館の市民利用制度です。私は、同図書館のホームページで、「西洋古辞書・古事典」という特別コレクションの存在を知りました。私は、近世の日本に輸入されたラテン語辞書類に関する論文を昨年『日蘭学会会誌』に発表しましたが、それに関連してラテン語辞書の歴史そのものにも大きな関心を抱いています。ところが、京都外国語大学付属図書館のホームページでこの「古辞書・古事典コレクション」の一覧リストを見て、私は古いラテン語辞書を含むその蔵書内容の豊富さに驚きました。活版印刷術発明以前の羊皮紙写本に綴られた『ラテン語・ドイツ語辞典』を初めとして、15世紀から19世紀にヨーロッパで出版された貴重なラテン語辞書類が目白押しです。19世紀の香港で出版された『中国語・ラテン語辞典』もありました。私は、ためらうことなく同図書館の市民利用制度に申し込み、司書の皆様の大変温かいご配慮をいただき、これらの貴重書を読覧することができました。市民利用者として、図書館に自由に出入

りできる「ライブラリー・カード」まで作っていただけることは、他の大学に属する研究者には不可能なことであり、私は市井の一学者になったことで思わぬ恩



恵に浴しました。このような市民利用制度を創設された図書館関係者の皆様に感謝するとともに、そのご見識に心からの敬意を表する次第であります。ドイツへの出発の日が迫るまで、私が実際に図書館を利用させていただいた期間はわずか数ヶ月でしたが、今回貴重な古辞書類に直に触れて学んだことは実に多く、必ずやこのことをドイツで継続する学問生活に生かし、帰国後はその成果を何らかの形で発表してご恩に報いたく思っております。

話は変わりますが、京都という日本の古都は、意外にもヨーロッパの古典語であるラテン語を街角で見かける機会が最も多い町です。四条河原町西の「イノブ」 という店の正面壁には、四つのラテン語の金言が各階に刻されており、錦林車庫バス停東隣の「金芳堂」には、これまた複数のラテン語の格言が美しい煉瓦壁に彫られています。京都府立医科大学附属病院の「こどもの病院」の玄関ロビーの奥壁には、医師と患者の信頼関係を説くガレーノスの言葉がラテン語で記されています。そして京都外国語大学の正門を入った前の建物には、「Pax mundi per linguas」(諸言語を通じての世界の平和)という motto が掲げられています。上記の貴重な西洋古辞書類は、現在の理事長様がかつて図書館長をされていた頃に蒐集に努められたと伺っております。東西の伝統を尊ぶ国際都市京都を代表する外国語の殿堂、京都外国語大学の建学の精神とその実現に改めて心からの敬意を表しつつ、市民利用者としての私の感謝の言葉といたします。

はらだ ひろし(ラテン文献学者)